

ミュージカル「シスタス」にみるウーマンフッド

岩本 裕子

はじめに

‘SISTAS’ とは SISTERS の口語表現で、決して上品ではない俗語である。ブロードウェイ・ミュージカルの題名となったこの表現に対して、「‘SISTAS’ではなく‘SISTERS’ というタイトルだったら観に行かなかったかもしれない」とある観客が語った。「‘SISTERS’ が上流階級が使う表現である一方、‘SISTAS’ は中流階級以下の人たちが用いる表現だと思う」と前置きをした上での語りだった。¹

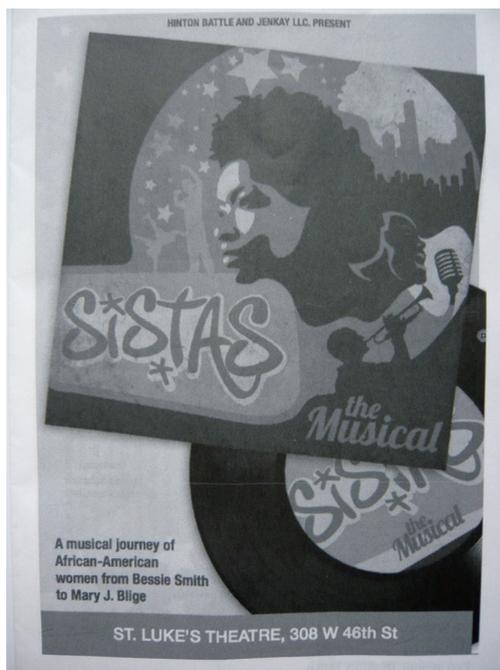
この観客の言葉通り、ミュージカル「シスタス」は、アメリカ社会で二重、三重の差別を抱えて生きてきたアメリカ黒人女性の歴史を、彼女たちのヒット曲を紡ぎながら語り継ぐ形式で展開される。2005年に誕生した「シスタス」は、2011年10月にブロードウェイ・ミュージカルとしてデビューした。筆者は2013年3月と8月に「シスタス」を観る機会を得たので、ここに紹介し、「ウーマンフッド」の視点から分析したい。

「ベスト40 (Top-40) 曲を紡いで語られるアメリカ黒人女性の物語は、3度のトニー賞受賞者ヒントン・バトル (Hinton Battle) 制作、ドロシー・マーシク (Dorothy Marcic) 脚本、ケネス・フェロン (Kenneth Ferrone) 監督作品である」という宣伝文句の元、連日公演ではなく週末のみ週2日間だけ、マンハッタン46丁目の聖ルカ教会地下にある劇場で公演されている。3月時点では、劇場で配布された小冊子 (brochure) 以外十分な資料もなく、CDもDVDも入手できないまま、筆者は8月に2度目の鑑賞をする予定だった。

ニューヨークでの筆者の職場であるニューヨーク公立図書館ハーレム分館、シヨンバーグセンターで、‘sistas’ で検索したところ、“Sistas: The Musical” Visual DVD とあった。ミュージカルそのものではなく、出演者な

どを迎えたセンター主催講演会を録画したDVDだった。筆者の仕事最終日(2013.8.24.)は土曜日で、同日夕方には「シスタス」鑑賞予定であった。この日にDVDの存在を知り、観ることができ、単にミュージカルを観るだけでは得られない貴重な情報を関係者から聞くことができた。第1章第2節で検討する。

この日の夕方、2回目の鑑賞での大きな収穫は、脚本家(原作者)ドロシー・マーシックが、公演終了後にステージに立ち、観衆にメッセージを残したことだった。このときに、3月にはなかった「シスタス」のDVDをマーシックから購入することもできた。本稿執筆にあたり、重要な資料となったことは言うまでもない。付録として作成した【使用曲一覧：アルファベット順】は、小冊子及びミュージカル「シスタス」のホームページ(HP)を参考にした。36曲の歌が紡がれるにあたって語られる、出演者たちの言葉の中に「ウーマンフッド」を読み込んでいきたい。



「シスタス」パンフ

第1章 ミュージカル「シスタス」の誕生

第1節 劇作家ドロシー・マーシックの意図

2013年3月に予備知識もないまま初めて「シスタス」を観た筆者は、原作者である劇作家は当然ながら黒人女性だと思いこんでいた。小冊子に記載されていた「劇作家の覚え書き」²を読んで、その意図に納得したときにも、人種を疑うことはなかった。

本稿執筆を決めた時点で、資料としてミュージカル「シスタス」のHP³を閲覧はしていた。女優たちがその写真を掲載する一方で、制作者、監督、さらに劇作家の写真は掲載されず、彼らの人種を特定することができなかった。「ドロシー・マーシック」で検索⁴して初めて、彼女が白人だと認識できたときも、にわかに信じがたかった。

ちなみに、次節以降で言及していくが、制作者ヒントン・バトルは黒人男性、ケネス・フェロン監督は白人男性である。制作側の首脳陣が白人であることは、「黒人の黒人による黒人のための」という発想はあり得ないことになる。このことは、第3章第3節の結語にもつながる事実である。

2013年現在、脚本作家の仕事に重心を置いた活動をしているドロシー・マーシックは、大学教員でもあり、ヴァンダービルト大学教授を経て、現在はコロンビア大学教授である。その経歴は、フルブライト研究員としてプラハ経済大学で招聘研究員、チェコ共和国大使の顧問、コペンハーゲンで開催された国連経済社会開発会議の代表や、国連女性会議の代表として、社会的な活動も経験した。ヴァンダービルト大学で大学教員の職を得て以降は、劇作家としての仕事に専念できるようになったとのことである。

マーシックを劇作家として有名にしたのは、彼女が初めて書いた「リスペクト」(Respect: A Musical Journey of Women)と題されたミュージカルだった。♪ Someone to Watch Over Me から♪ I Will Survive まで、「ベスト40」のヒット曲を紡ぎながら、アメリカ女性の歴史を語る内容だった。20世紀前半の女性の歴史を歌でつないでいくのだが、人種は黒人に限定したものではなく、人種に拘らず女性に限定した歴史の語りだった。⁵

2002年出版のマーシックの著作 *RESPECT: Women and Popular Music*⁶ に基づいたミュージカルである。1900年以降にアメリカで作られた女性に関する歌、ベスト40曲を分析したこの著作では、共依存関係から独立へと成長する女性の人生の旅が描かれる。夫の「財産」だった状態から、20世紀に各地の代表になっていく女性たちの成長が確認できるのだった。このミュージ

カルは、全米20都市以上、オーストラリア、南アフリカ共和国、イギリス、オランダ、イスラエルで公演されてきた。

「リスペクト」の登場人物だった2人の黒人女優たち、ポーラ・シャヴィス (Paula Chavis) とエイドリアン・ロースト (Adrienne Ewing-Roust) が、マーシクに黒人女性のためだけのミュージカルを書いてほしいと依頼したことが、「シスタス」誕生の契機となった。「なぜ『リスペクト』だけでは十分でなく、別のミュージカルが必要なのか」とマーシクが聞いたとき、エイドリアンはこう答えたという。

「弱々しい乙女がチャミング王子[シンデレラと結婚する王子の名前。(女性にとって)理想の男性(求婚者)を意味する]が助けてくれるのをただ待ち続けるなんて、私たち黒人女性には考えられないことだから！」と。この言葉は、白人女性マーシクの心に響き、彼女がまず始めたことは、黒人女性へのインタビューだった。1週間に2回、午前中に黒人女性たちとのインタビューを1年間続けた。ノース・ナッシュヴィルのシニア・センターで続けられたこのインタビューで自らの人生を語り継いだ黒人女性たちによって、数年後にマーシクは「シスタス」を書き上げたのだった。白人女性マーシクは、彼女たちの人生に魅了され、黒人女性の人生の追体験とも言える「シスタス」を誕生させた。

2011年7月、ミッドタウン国際劇場 (The Midtown International Theater) での初公演は、制作者側の予想を遙かに超える反響で、聴衆からの強い希望に後押しされて、数ヶ月後にはオフ・ブロードウェイでデビューすることになったのだった。2013年秋で2年目を迎えてもなお、毎週末満員の聴衆に支えられながら、聖ルカ劇場は、観客の興奮の渦に包まれている。

「劇作家の覚え書き」は、「ポーラとエイドリアン、最初の疑問を私にくれてありがとう」と結ばれている。⁷「チャミング王子」を待つことが白人少女たちの理想とされていたマーシクに、白馬の騎士の存在などあり得ない黒人女性たちの人生について知らせた、2人の黒人女優たちの勇気が、今ブロードウェイ・ミュージカルとなって、多くの観客に語り継がれているのである。

第2節 ションバーグセンター主催講演会

2012年秋、ションバーグセンターにおいて、同センター主催講演会が開催された。2人の黒人女優、ジェニファー・フーシェ (Jennifer Fouche) とレキシ・ローデス (Lexi Rhoades) と、ケネス・フェロン (Kenneth Ferrone) 監督、さらに劇作家(原作者)ドロシー・マーシクの4人がゲストとして登壇し

て、各自から発言があったのち、会場に集まった聴衆との質疑応答（インタビュー）が行われた。時間にして66分間の講演会が録画されていて、その映像を見る機会に恵まれた。⁸

まず最初、ジュニファー・フーシェによる独唱から始まった。ビリー・ホリデイ（Billie Holiday）の一世一代のヒット曲「奇妙な果実」♪ Strange Fruit だった。⁹ アカペラで歌われたこの歌の意味を知らない聴衆は皆無のはずの会場は、静まりかえって聞き惚れていた。南部白人によるリンチによって、ポプラの木に吊された黒人男性の死体を表現する「苦い作物」（bitter crop）で閉じるこの曲は、ミュージカルでは、親族の男性について語られる部分で歌われた。第2章第3節で検討する。

講演会では、主としてこのジュニファー・フーシェと原作者ドロシー・マーシクが語り、監督ともう1人の若い女優は聴衆からの質問に答えた。まず、マーシクは、「シスタス」ができあがった経緯を説明して、「待つべきだ！」と言われ続けた黒人女性たちが気づき（awareness）を重ねて、力強くなっていく過程を描いた、と語った。

フーシェは、白人女性作家が黒人女性のことを書くことについて、「自分たちのことを白人たちは知らない」としながらも、週に2度1年間インタビューを続けたマーシクを評価して、この劇を認め参加していると語った。若い女優ロードスに対して、異人種間恋愛に関する質問が出ると、それを受け入れるかのように劇場に集う聴衆たちも彼女と一緒に歌い出す場面があったことを説明した。

マーシクに対して、「貴女のことについて話して」という質問が出ると、「出会う女性たちが大変興味深かったので、楽しくユーモアにあふれた作品ができた」として、女性というより人間として、全ての人たちが、家族を持つ。その全ての人とは、外国人も含む、中国人であろうとオーストラリア人であろうと、皆家族を持つことは同じで、その思いが舞台によい相性（chemistry）を起こすのだと説明した。「どのようなエネルギーもそこから生まれる」「そう、私たちは皆家族だから！」と結んだ。この言葉は「シスタス」の最後に歌われる♪ We are family で表現される。

このあと、本稿冒頭で言及した質問が出された。タイトルを付けるにあたって、80通りも考えたし、もっと長いタイトル案もあったが、「シスタス」にしてよかったと思うとマーシクは答えた。舞台の脇で、キーボードを担当する（白人）男性がいるのだが、彼を姉妹の兄弟として設定することも考えたが、会話に大きな変更が必要になるので、彼はそのまま黒子として音楽担当をし

てもらった、とも語った。「白人女性の視点から言っても、人種は非常に重要な観点だと思う」として、黒人兄弟の妻として、義理の妹に白人女性を1人加えたことも説明した。この白人女性ヘザー (Heather) の存在が、この劇に深みを出しているのだが、このことは、第2章第3節で論じる。

聴衆からの最後の質問は、黒人女性から出された。劇で表現される黒人女性たちの人生は、決していい経験をしていると思えないし、歌われる歌も決して幸せな歌ではない、むしろ苦しい歌が多い。喜びとは思えないことも、楽しく歌っている、など疑問を多く呈したのだった。マーシックからは、「とても興味深い議論する価値がある質問だ」とは言ったが、結論には言及しなかった。

講演会を閉じようとする、会場から1人の男性が、ローデスが劇中で歌った♪ I Have Nothing に感激したので、ここでも歌ってほしい、と頼んだが、「どうかショーを見に来て！」と笑顔で答えてお開きとなった。確かに、今は亡きホイットニー・ヒューストン (Whitney Houston) の大ヒット作¹⁰がローデスによって絶唱されたとき、会場は割れんばかりの拍手で鳴りやむことはなかった。

第3節 メディアでの紹介・批評

聖ルカ劇場で公開直後、2011年10月28日付け *New York Times Review* の劇場批評欄で紹介された。¹¹ この批評では、登場人物の紹介に関して誤解表現があったため、11月3日付けで「修正」が出された。マーシックのHPからこの批評を入手したが、HPで掲載された *New York Times Review* の批評は、修正を加えた形で掲載されていた。

誤解表現の時点では、登場人物に母親がいたように伝えられていたが、母親ではなく三姉妹の1人、シモンであった。この劇に母親が登場しないことは非常に重要な点だと思う。第2章第2節で論じる。

同批評の見出しは、「シュープリームスではないが、メロディは再現！」で、脚本を高く評価し、監督による演出も認めている。何よりも題材とした数々の歌のお陰で、格調高い仕上がりになっていると評価した。特筆された歌は、ジェニファー・フーシェが独唱した♪ *Tain't Nobody's Business If I Do* (1922) から、1960年代のヒットメドレー、特に登場人物5人全員で合唱された♪ *Stop! in the Name of Love* (1965) だった。

前者は、「ブルースの女王」ベシー・スミス (Bessie Smith) のヒット作、後者はシュープリームス (The Supremes) の代表作である。劇中、シモンが、祖

母の遺品から銀色の長い手袋を出した瞬間に、観客から歓声が上がった。ダイアナ・ロス (Diana Ross) とシュープリームの曲が歌われることが予測できたからだろう。批評でも、「金ラメのガウンをまとった5人全員の合唱」と説明を加えている。

もう1曲、ビヨンセ (Beyoncé Knowles) の♪ Single Ladies も絶賛していた。別場面だが、5人がビヨンセのダンスを真似ながら、“Now put your hands up Oh, oh, oh, oh, oh, oh” とダンスするところでは、観客は一緒に拍手しながら、大合唱していた。

黒人リンチ、フリーダム・ライダーズ、SNCCなどに触れた脚本から、「弱さと傷つきやすさの違い、痛みと決めることと、痛みという感情におぼれることは違う」ことを読みとっていた。「気立てがよくて安価な夕べに、ユーモアにあふれた印象的な歌を聴くことができる」と読者に推薦して、批評を閉じている。

もう1件の批評は、1945年に創設された黒人グラフ雑誌『エボニー』(EBONY)である。「シスタス」批評が掲載されたとき、そのキャッチ・コピーは「ヒントン・バトル制作の～」であった。¹² 2013年5月号としてウェブ上で公開されたので、日本でも確認することができた。ションバーグにおいて本誌確認を行ったが、紙媒体の2013年5月号にこの記事を見つけることができなかった。ションバーグの司書によれば、紙媒体に間に合わなかった記事に関してはウェブ上に掲載される場合がある、とのことだった。ウェブ上の記事を読み込もう。

「黒人ウーマニスト賛歌が『シスタス』で輝く」との大見出しの元、小見出しは、「ビリー・ホリデイからビヨンセまで、ヒントン・バトル制作のオフ・ブロードウェイ作品が歌で女性の力を称賛する」である。ベシー・スミスの曲ながらカバーしたことで『エボニー』では、「ビリー・ホリデイの」と説明が付いて♪ Ain't Nobody's Business を取り上げ、ビヨンセの♪ Single Ladies までと説明している。

使用している曲に、すべて歴史的な意味があることを称賛しながら、特に『エボニー』の記事が取り上げたのは♪ Ain't Gonna Let Nobody Turn Me Around だった。亡き祖母が公民権運動の時期に、学生非暴力調整委員会 (SNCC) のメンバーだったことが紹介されたときに歌われた曲である。第2章第1節で詳細に論じる。

さらにもう1件、ションバーグでの検索の結果、2011年12月22日付けの *New York Amsterdam News* の芸能紹介欄の記事を入手することができた。¹³

『シスタス』は黒人女性を称賛する」と題して、大変好意的な評価がなされた。黒人女性たちが自分の感情を吐露するための手段として彼女たちの歌をとらえながら、個々の歌の説明は省きながらも、9曲列挙することで内容を紹介している。これまでに言及してきた曲に4曲含まれるので、残りの5曲を紹介してみる。♪ Oh, Happy Day ♪ God Bless the Child ♪ You Keep Me Hangin' On ♪ Tyrone さらに、巻末のリストにはないが1956年にマヘリア・ジャクソン (Mahalia Jackson) が歌った♪ Precious Lord をあげている。この曲に関しては、第2章第1節で説明を加える。

「黒人女性の強さと力を綴ったこの劇は、観る価値のある美しく楽しい物語である」として、「9歳の娘を連れて一緒に観たが、彼女にとっても感動的な素晴らしい時間となった」と、読者に勧める言葉で結んでいる。

第2章 ベシー・スミスからメアリ・ブリジまでの音楽の旅

第1節 語り継がれる黒人女性たち

二次史料の検討を終えて、いよいよ劇そのものを検討するが、まず5人の登場人物を紹介しよう。亡くなった祖母にとっての孫娘にあたる3人の黒人女性姉妹シモン (Simone)、グロリア (Gloria)、ロベルタ (Roberta)、加えてシモンの娘タミカ (Tamika 祖母からは曾孫)、さらに姉妹の兄弟の妻として、白人女性ヘザーの5人の女性たちである。

シモンは、アトランタにある黒人女子大のスペルマン・カレッジを卒業生総代で卒業して、ハーバード大学大学院に進学し、大学教員である。グロリアは熱心なキリスト教徒で、教会の話 frequently に出す。ロベルタは職業は明らかにしていないが、大変辛い経験をしていることを告白するが、第2章第3節で明らかにする。グロリアの娘タミカは、叔母たちには認めてもらえないボーイフレンドとつきあっている。

唯一の白人女性ヘザーは、ジャズクラブで姉妹の兄弟がサクソフオンを吹くのを初めて見て、恋に落ちたと説明する。異人種間結婚の2人がとてもうまくいっていることを説明するときに、ベシー・スミスの曲♪ A Good Man is Hard to Find が歌われる。いい男を見つけるのはなかなかだけど、一度見つけたのなら、十分努力して離さないようにしなさいよ、と歌詞の最後で歌われる。

義姉妹たちが黒人女性の苦しみを歌に乗せながら、白人女性のように庇護されるだけの人生ではない、自分の身は自分で守る、という人生を生きてい

る黒人女性との会話は、ヘザーにとっては時として「針のむしろ」の場面もあった。

♪ I Am Not My Hair などの歌から、ヘザーは「どうして黒人女性は髪型に拘るの？」と質問すると、ロベルタが「黒人女性が髪型を気にするのは、白人女性が体重を気にするのと同じよ！」とやってのけるのだった。体重を気にする、すなわちダイエットしてやせたい願望が白人女性には強い、という意味だろう。観客は大きな歓声を送っていた。ちなみに、筆者が観た3月も8月も観客の多くは黒人女性だった。

これまで何度も言及したベシー・スミスの曲♪ Tain't Nobody's Business If I Do は、全員の合唱で、効果的に紹介される。1922年にできたこの曲は、何十年にもわたって男女を問わず黒人ミュージシャンによってレコーディングされてきた。すでに紹介したようにビリー・ホリデイの他、ダイアナ・ロス、ダイナ・ワシントン (Dinah Washington)、エラ・フィッツジェラルド (Ella Fitzgerald)、ティナ・ターナー (Tina Turner) などに加えて、アビー・リンカン (Abby Lincoln)¹⁴ もカバーしていた。

「そうするのは自分の勝手。他の人に関係ないわ (Ain't Nobody's Business)」と歌うベシー・スミスの想いは何だったのだろうか。ウェブ上の音楽評論などでは、歌詞から推測して「居直りと言えば居直り、自由と言えば自由、古い時代の束縛を離れた気楽さと誰にも頼れない寂しさが同居」¹⁵ と解釈する音楽家もいる。

歴史研究者としての筆者は、彼女の生涯から歌詞への想いを読み解きたい。「ブルースの女王」と呼ばれ、ビリー・ホリデイなど後進に大きな影響を与えたベシーは、1892年に周辺南部テネシー州のチャタヌーガ (Chattanooga, Tenn.) で生まれた。アラバマ生まれの両親が移住してから生まれた7人きょうだいの末っ子だった。1890年のチャタヌーガは、南部の再建中止に伴って、深南部諸州の農村から都市部へ移動しようとする解放黒人たちであふれていた。そんな町からアメリカを代表するブルース歌手になった彼女の波瀾万丈の人生は、力強く、感動的な声や、そのまま歌詞にも反映された、と説明されている。

史料とした百科事典のベシー・スミスの紹介文冒頭に、代表作♪ T' Ain't Nobody's Bizness If I Do (綴りは史料のまま) は「日曜日に教会へ行こうが、月曜日にシミードダンス [1920年代に流行したジャズダンスで上半身とシュミーズを震わせて踊る] を踊り続けようが、他人にとやかく言われる筋合いはない」という意味だとしている。ベシーが世界的な称賛を受ける歌手として成

功した一方で、黒人女性としてのウーマンフッドという因習的な役割に挑戦してきた人生を生きただけを評価している。¹⁶

ベシー・スミスが活躍したハーレム・ルネサンス¹⁷の1920年代から1930年代にかけて、青春時代を送った亡き祖母が大切にしていたものが、遺品から次々登場して話の内容を深いものにしていった。タミカが見つけたLPレコードを、蓄音機を出してきて、5人で聴くのだが、徐々に5人の顔が不愉快そうに曇り始め、聴くのを止め蓄音機のふたを閉めたのだった。

LPは1931年の曲♪ That's Why Darkies Were Born で、LPから聞こえた歌は白人女性ケイト・スミス(“Kate” Smith)が歌っていた。アメリカを代表する作曲家でユダヤ人のアーヴィン・バーリン(Irving Berlin)が作った♪ God Bless America を歌った歌手として、当時有名な女性だった。曲名にある“Darkies”は、黒人のことを表現する当時の差別用語で「黒人がこの世に生まれた理由」を、「綿花を摘み取り、とうもろこしを刈り取り、奴隷として働き、歌うため」と歌ったのだが、姉妹たちが不愉快になるのも当然だった。1930年代にはこのような歌が歌われていて、しかもそのLPを祖母が持っていたことが語り継がれたのだった。

次に遺品から出てきたのは、「黒人は邪悪ではないと同様、人種差別は美德でもない」(Black is not a vice, nor is segregation a virtue.)と書かれた横断幕だった。この標語の上にSNCCと書かれていた。すでに言及したように祖母はSNCCのメンバーだった。「SNCCは何の略だった?」と言ひ合い、正確にStudent Nonviolent Coordinating Committeeと言うのに、少し時間を要していた。

この横断幕を持って歌われたのが、♪ Ain't Gonna Let Nobody Turn Me Around だった。使用曲一覧では制作年が示されず、traditionalとされている。記録によれば、公民権運動真っ最中の1962年夏、ジョージア州オルバニーで最初に歌われたとある。民衆集会の場において、第5巡回連邦裁判所のタトル判事が、デモ行進禁止命令を出した。この禁止令を聞いた参加者たちの間から自然に歌われたのが、この曲だったという。民衆は禁止令に抗議するように、♪ Ain't Gonna Let No Injunction Turn Me Around と合唱したのだった。元々この歌は、コーデル・リーゴン(Cordell Reagon)が率いたSNCCフリーダム・シンガーズ(SNCC Freedom Singers)が歌った曲だった。¹⁸ この歌の後、ヘザーが「シャーリー・チゾム(Shirley Chisholm)¹⁹を思い出すわね」と話した。

横断幕ばかりか、スライド写真も見つけて、それら映像を見る場面もあった。公民権運動期にSNCCのメンバーだった祖母が目撃した歴史的な場面がスライド写真になっていた。ランチ・カウンターでの座り込み(sit-in)運動、

ワシントン大行進の参加者たち、スピーチをするキング牧師など、1960年代のアメリカの様子を知らせたのだった。

さらに、マヘリア・ジャクソンの♪ Precious Lord を歌ったのは、信仰心の篤いグロリアだった。前述したように、小冊子掲載の使用曲には入っていなかったが、確かにグロリアによって歌われた。この曲は元々賛美歌 557 番で、1932年にトーマス・ドーシー (Thomas Dorsey: 1899-1993) 牧師によってゴスペルとして広まり、流行したのだった。ドーシー牧師は、ジャズ歌手“Georgia Tom”として有名だったが、1921年にジャズからゴスペルへと転向し、聖職者となったのだった。

旧約聖書のイザヤ書 41:13 の下りに曲を付けた♪ Precious Lord は、後にマヘリア・ジャクソンやエルヴィス・プレスリー (Elvis Presley) によって歌われた。キング牧師が好んだ賛美歌でもあったという。「シスタス」で歌われた宗教歌と言え、他に♪ Oh, Happy Day があるが、劇の最初に5人全員で合唱された。日曜礼拝に出ると想定して、皆華やかなつば広の帽子をかぶって歌い出したのだった。教会音楽、特にバプティスト派のゴスペル音楽が黒人女性たちの精神の支柱になっているということだろう。

第2節 「母」たちから「娘」への語り継ぎ

登場人物で若い世代は、シモンの娘タミカだけで、最初に登場したタミカが歌ったのは、2003年のヒット曲♪ Milkshake だった。“twerk”とか“twerking”と呼ばれるヒップホップダンスで、腰をくねらせながら歌い踊るタミカに、観客はまず最初の拍手を送った。母親や叔母たちは、“twerk”にまゆをひそめている。白人の叔母ヘザーは、タミカの肩を出すファッションをなんとか止めさせようとして、タミカがうっとうしがる場面もあった。

さらに実の母だけでなく叔母たちも、タミカがつきあう男性に誠意がない様子につきあいを反対することが前半の話の軸になっている。「シスタス」で取り上げる曲のほとんどは、男女の恋がテーマとなり、幸せな恋愛の歌は少なく、失恋や男への恨み言、まさに憂鬱 (blue) を呼ぶブルース (blues) が多い。

シモンが娘タミカにつきあいを止めるように説得しようとして、思わず「ママのようにシングルマザーで生きていくのは苦しいのよ」と叫ぶ場面があった。タミカが舞台から去った後、シモンは、♪ Stormy Weather (1933) を切々と歌うのだった。男が出て行って自分一人に残された／外では嵐、雨ばかりが降り続く／人生は空虚で陰鬱、無惨／自分がかわいそうで耐えきれない／去った男の代わりにブルースが居座るようになった／ただ神に祈るだけ／太

陽の下をもう一度歩けますように、と／私は一人、外は雨…。

この♪ Stormy Weather を HP に掲載された使用曲一覧表では、エセル・ウォーターズ (Ethel Waters) の曲をのちにレナ・ホーン (Lena Horne) が歌ったと紹介している。1933 年のヒットチャート第 1 位の曲だった。エセル・ウォーターズは、「70 年に及ぶ芸歴で、多くの『黒人の初めて』を達成した歌手で女優」という説明²⁰の通り、歌手としては当然ながら、ハリウッド女優としても先駆的存在だった。ただ、黒人女優のステレオタイプの「マミー」、いわゆる「ジェマイマおばさん」から抜け出すことはなかった。エセルが♪ Stormy Weather を歌ったのは、ハリウッド映画 “Cotton Club Parade” の中だった。

一方、レナ・ホーンは、頑固に自己主張を続けて、美人女優「ジェゼベル」型の女優として活躍した。²¹ 1943 年に制作された黒人俳優による映画 Stormy Weather でレナ・ホーンは主役を演じたのだった。同時期にピリー・ホリデイによって、1975 年にはエラ・フィッツジェラルドによってもカバーされ、語り継がれる曲である。

母や叔母に反対されて、ボーイフレンドへの想いが揺らぎ始めるタミカが歌ったのが、第 1 章第 2 節で言及したホイットニー・ヒューストンの♪ I Have Nothing だった。このあと、ボーイフレンドからかかった電話に対して、タミカが歌い始めるのが、エリカ・バドゥ (Erykah Badu) の 1997 年のヒット曲♪ Tyrone だった。この曲をよく知らなかった筆者には、この歌に対する観客たちの反応の方が大きな驚きだった。3 月も 8 月も、タミカと一緒に観客は大合唱を始めたのだった。本稿のために、歌詞を調べてわかったのだが、つきあっていた男を捨てるセリフが続いていた。

ライブコンサートで初めて披露された曲らしく、歌詞を聴くにつれ、観客が歌詞の内容に同意して盛り上がり「落語のようなオチも見事」と解釈した日本人評者もいた。²² 「あなたにはもううんざり／何一つ買ってあげたことがない／どこへ行くときだって、ジム、ジェームズ、ポール、タイローンを連れてくる／たまには 2 人だけで一緒にいられないの」と、デートで財布を開けたことがない (支払ったことがない) 恋人に文句を言って、愛想が尽き、別れようと最後に言うのが、「彼に来てもらって／面倒を見てもらえばいいじゃない／タイローンを呼んだ方がいいわ／私が呼んでると伝えて／でも待って！／私の電話は使わないでよ」だった。

タミカがこの歌を歌い始め、歌詞のタイローンが出たところで、ロベルタが「タイローンって誰？」と茶々を入れるのだった。実に楽しい曲で、大盛り上がりした観客とは対照的になぜ盛り上がったかが理解できなかった筆者

は、ミュージカル終了後、劇場外、路上にたむろして帰ろうとしない観客にあの曲は何かを聴いたのだった。

「男に捨てられ1人残される女」という位置から、あっさり女の方から男を捨てる、という状況に、観客は大喜びしたようだった。♪ Tyrone の曲が流れ始めた瞬間から、観客席がウキウキし始めた理由が、随分時間が経って理解できた筆者だった。タミカがボーイフレンドとつきあうのを止めたことで、話の展開は後半に入っていった。

祖母の遺品整理が大きなテーマである「シスタス」には、人種を超えた孫娘である4姉妹と曾孫は登場しても、祖母の娘であるはずの3姉妹の母親は登場しなかった。*New York Times Review* の評者が出演者の役回りを誤解したように、母親の存在があっても不思議はないはずである。ただ、黒人女性をめぐる小説に多く見られる設定では、祖母と孫娘という語り継ぎ関係が多い。

ハーレム・ルネサンス期の人類学者で作家のゾラ・ニール・ハーストン (Zola Neale Hurston) の代表作、小説『彼らの眼は神を見ていた』(*Their Eyes Were Watching God*) では、小説の主人公ジェイニーは祖母ナニーから多くの語り継ぎを受ける。かつて奴隷だったナニーは、孫娘に対して黒人女性の存在を「この世の驢馬」(de mule uh de world) だとして、孫娘が自分と同じような人生を歩かないように神に祈っていると話すのだった。ジェイニーは自分が選んだ男との人間的な生き方をする人生を選ぶのだが、1930年代に書かれたこの小説は「大胆なフェミニスト小説」と評価されるのだった。²³

祖母と孫娘の例をもう1つ紹介しておきたい。²⁴ 舞踏家、女優としても活躍する詩人マヤ・アンジェロウ (Maya Angelou) は、1993年1月20日のクリントン大統領第1期就任式で、「朝の脈動」(*On the Pulse of Morning*) と題する自作の詩を朗読した。彼女は、女であることは、「懸命に働き、自分のことを自分自身でかまい、何の恩恵にも被らないこと」であり、自分の人生の手綱は自分で握ることだと語った。

マヤは少女期にレイプされて以来、何度も男たちのレイプの対象とされ、16歳で妊娠、17歳で母になった。祖母に育てられたマヤは、「1人で生きること」を教えられ、母からは自由を教わり「私という誰にも束縛されない女性」になったという。母や祖母のように、「愛することで子どもたちをしつけ、教育し、社会を作っていくことを当然のようにするものだ」とマヤは語っている。

ジェイニーとナニー、マヤと祖母、といった孫娘と祖母の関係と、「シスタス」で展開される孫娘たちが思い出す祖母に関する語りは、重なる部分が

多く、黒人女性に特有な語り継ぎを実感する。マーシクが、1年をかけてインタビューしてきた黒人女性たちの言葉の中に、祖母の話が多く出されたことは容易に想像できる。母から娘へ、祖母から孫娘へと語り継いで、社会を作ってきた黒人女性の一面を十分に描ききったことで「シスタス」は成功したミュージカルとなったのだろう。

第3節 シスターの「告白」

舞台に登場する4人の人種を超えたシスターたちのうち、3人を選んで彼女たちの「告白」に耳を傾けてみたい。まずタミカの母親、シモンである。祖母の遺品が置かれた屋根裏には、沢山の箱が置かれて、その箱から次々懐かしい品々が出てくるのだが、ここで出てきたのは、「卒業生総代の挨拶文」だった。

シモンがアトランタにある黒人女子大スベルマン・カレッジを卒業生総代で卒業して、ハーバード大学大学院に進学し、大学教員をしていることはすでに紹介した。その挨拶を聴いてみよう。「1986年スベルマン・カレッジの卒業生を代表して、ご挨拶します。まず最初に、大学を卒業させてくれた両親に感謝したいと思います。父は小学校6年生までしか学ぶことができず、母は高校まででした。両親は精一杯真面目に仕事を続けて、私を大学へ行かせてくれました」と謝辞を述べたのだった。「母親」が登場するのは、この部分だけになるが、母親との確執があるようではないので、脚本として、祖母と孫娘という設定ただけなのだろう。

次はロベルタである。彼女の個人情報ほとんど知らされることなく、少し皮肉屋だということが台詞から推測できた。白人たちへの警戒や怒りは消えることはないようで、白人の義妹ヘザーに対しても、「白人の貴女にわかるわけがない！」と言い返す場面もあった。このロベルタから思いもかけない「告白」がなされるのだった。

タミカが、誠意のないボーイフレンドに会いに行こうとしたため、やめさせようとして思わず「行ったら私になるわよ！」と叫ぶのだった。一同静まりかえり、ロベルタの告白を聴くのだった。ロベルタが13歳の時、見ず知らずの白人男性にレイプされたと言うのである。事件が起きて帰宅したとき、両親に全てを話したという。両親と一緒に警察にも行ったが、警察官は全く取り合ってくれなかった、とも悔しそうに話した。大声で泣き出したロベルタをシモンが抱きしめるのだった。

自らの過去を告白したロベルタは、黒人男性がリンチの被害に遭ってきた

ことにも触れた。テネシー州で暮らしていたウィリアム叔父がリンチで亡くなったことを話してから、♪ *Strange Fruit* を絶唱したのだった。シオンバーグセンター主催講演会で歌ったとき以上に、熱のこもった訴えに、聴衆たちはただ静かに聴くだけだった。

ロベルタから冷たくあしらわれていたヘザーは、自分の母親（白人）が公民権運動期にフリーダム・ライダーのメンバーとして、人種差別反対を訴えて、南部へ入るバスに乗ったことも話していた。彼女が絶唱する曲として♪ *Society's Child* が選ばれた意味は大きい。1968年にジャニス・イアン (Janis Ian) がデビュー曲として歌って大ヒットした曲である。東欧ユダヤ系の白人女性であるジャニスはこのとき17歳で、異人種間恋愛を歌った問題作で、華々しくデビューしたのだった。

黒人青年と恋に落ちた白人女性が、異人種恋愛を嘲笑したり、敵意をもったりする社会に立ち向かった経験を綴った歌詞である。女性の母親に黒人青年を会わせようと連れて行くと、母親は彼のことを名前では呼ばず、“Boy”と呼びかけたり、2度と会わないように強制されたりするのだった。“I can't see you any more”と繰り返しながら、最後には“I don't see you any more”と彼女の決心を伝えるのだった。

この歌が発表された1968年と言えば、4月にはキング牧師がメンフィスで、6月には民主党大統領候補ロバート・ケネディがカリフォルニアで暗殺された年である。その前年1967年には、ブラウン判決に大きな貢献をした弁護士サーグッド・マーシャル (Thurgood Marshall) が初の黒人連邦最高裁判事となった。その一方で、2013年に破産申し立てしたデトロイト (Detroit, Mich.)、モータウン・レコード発祥地では、大規模な人種暴動が起きたのだった。自動車の町、モータウンを舞台とした映画『ドリームガールズ』(Dreamgirls)でも、この人種暴動が暗示的に表現されていた。

ベトナム戦争反対の気運も高まり、不安定な時代に、異人種間恋愛が受け入れられる素地はなく、母親に反対されただけで黒人青年との恋愛を諦めた女性の歌を絶唱しながら、ヘザーは、自分自身は黒人の夫を“a good man”として仲良く暮らしていることを確信しているようだった。「シスタス」で歌われた数少ない白人女性歌手の歌は、哀しく愁いに満ちたものだった。

三者三様のシスターの「告白」は、その歌われる歌によって、観客の心に深く残ることになっただろう。時代が生み出し、時代とともに歌われた意味は、その歴史が生み出したことに違いない。そうした歌を次世代の「教材」にしようという試みを次章で見えていく。

第3章 語り継ぎ教材としての「シスタス」

第1節 事前事後学習 (BEFORE & AFTER THE SHOW)

ミュージカル「シスタス」のHPには、このミュージカルを観る人々、特に若い世代が事前事後に学習できるように、質問形式の学習課題が設定されている。これらの質問に向かう以前に、アメリカ黒人史に関して予備知識のない観衆のために、1863年のリンカン大統領による奴隷解放宣言以降のアメリカ黒人史が解説されている。

1865年に南北戦争が終結して、奴隷制度廃止の合衆国憲法修正第13条通過、第14条による市民権獲得以降、1877年に再建が中止されるまでの事実が紹介されている。1896年の最高裁判決「分離すれど平等」(separate but equal)とともに南部で定着していく白人との人種分離制度、黒人差別の実情が伝えられる。

20世紀に入り、南部の農村から都市部へ、さらに北部の大都市への解放黒人たちの移動、黒人男性指導者たちの紹介へと続く。黒人の自助を説き、白人との融和を選んだブッカー・T・ワシントン (Booker T. Washington)、黒人の1割が教育を受ければ残りの9割を引き上げることができると「10分の1説」(“the talented tenth”)を提唱したデュボイス (W.E.B. DuBois)の存在が紹介された。

1906年のアトランタ (Atlanta, Ga.)、1908年のスプリングフィールド (Springfield, Ill.) など、人種暴動が続く一方、デュボイスの元で1909年に創設された全国黒人地位向上協会 (National Association for the Advancement of Colored People: NAACP)の説明の後、やっと黒人女性の成功者2人が紹介される。美容師として百万長者になったマダム・C・J・ウォーカー (Madame C.J. Walker)²⁵、教育者メアリ・マクロード・ベシユーン (Mary McLeod Bethune)²⁶である。

「シスタス」が対象とした時代、20世紀初頭以降、現在までのアメリカ社会の歴史的な流れを追いながら、それぞれの時代で活躍した黒人たちをアメリカ社会に位置づけるような歴史紹介をしている。シャーリー・チゾム、トニ・モリソン (Toni Morrison)²⁷、アンジェラ・デイヴィス (Angela Davis)²⁸、加えて芸能界で活躍した女性たち、オブラ・ウィンフレイ (Oprah Winfrey)²⁹からコンドリーサ・ライス (Condoleezza Rice)³⁰まで、黒人女性たちによって、アメリカ黒人社会を紹介している。

事前事後学習のコーナーでは、黒人を対象としたハリウッド映画やHBO

映画などが一覧表になっている。1915年公開の『国民の創世』(Birth of a Nation)から2011年に公開されたドキュメンタリー『フリーダム・ライダーズ』(Freedom Riders)まで、35本の映画の概要が紹介されている。

「シスタス」を若い世代(生徒)への語り継ぎ教材にしようとする意図は、明らかである。生徒の引率教員に対して、以下のような5項目の事後学習を列挙している。

1. ウェブ上で黒人史を学習させた後、4人グループごとに5分程度で発表させる。
2. 昔の流行歌(懐メロ)と最近の流行歌を2曲ずつ選択させ、歌詞の意味を考えさせる。
3. 両親や祖父母に、彼らの人生についてインタビューさせる。人生の喜び、恐れ、克服した困難、友情、教会の役割などをテーマとして、生徒にはレポートにして提出させる。
4. グループ分けした生徒たちに、雑誌、映画、テレビなどで表現される「美人」について議論させる。女性や少女にとって何が美の基準となるのか、普通の女性たちには何が悩みなのか、なども話し合わせる。
5. 選曲されたリスト(別表で36曲)から5曲選ばせ、その歌詞から女性に関する箇所の下線を入れさせ、それらの歌の意図、あるいは女性から男性に対する主張を読みとらせる。

以上のような学習で、若い世代に「歌」の持つ意味の深さを知らせることが可能になる。聞き慣れた曲、初めて聞いて心に残る曲、軽やかな乗りで踊り出したくなるような曲、思わず合唱に加わりたくなる曲、と「シスタス」で紡がれていく36曲が若い世代の「心を育てる」であろうことは容易に予想できる。歌の持つ「力」ということだろう。

第2節 女家長の遺したもの

「シスタス」の最後の場面で、姉妹たちは祖母の遺言を見つけ、ある程度の遺産があることを知るのだった。しかもその遺産を祖母は、大学で学ばたい黒人少女のための奨学金にするように遺言していた。このラストシーンを見て私は、1人の名もなき黒人女性のことを思い出した。

ミシシッピ州ハティスバーグ(Hattisburg, Miss.)で、87年間の人生を過ごしたオセオラ・マクカーティ(Oseola McCarthy)という黒人女性が、洗濯業

をしながら一生かかって貯めた15万ドルというお金を、黒人学生が大学で学ぶための奨学金にしてほしいと、1995年に南ミシシッピ大学に寄付したのだった。この事実は、百科事典の「教育」項目の導入に書かれてあった。名もなきこの黒人女性は、真面目にコツコツ働いて貯めた大切な遺産を、血縁もない後輩のための奨学金にしたのだった。³¹

オセオラ・マクカーティというアメリカ黒人女性の存在を知ったとき、史料を残したり、名前を残して有名とされたりした女性たちから学んだことは、彼女たちに限ったことではなく、名前を残すこともなかった無名の女性たちにもそのまま通じることを確信した。オセオラに限ったことではなく、「シスタス」の女家長がそうであった、という設定は、脚本家ドロシー・マーシックがインタビューし続けた黒人女性たちからこうした話を聞いたという可能性を考えることもできる。

経済的に決して豊かな人生を過ごしたはずもない、「シスタス」姉妹の祖母やオセオラ・マクカーティだけでない、多くの黒人女性たちが、自分が遺すものは、血縁ある親族だけでなく、血縁を超え人種でつながる後輩に残したいという思いを抱いていることを大変誇りに思う。

1619年に初めてアフリカから連れてこられたアフリカ女性、イザベラから始まるアメリカ黒人女性の歴史は、2013年までで394年経った。そのうち、1865年の憲法修正第13条によって奴隷制度が廃止されるまで続いた奴隷制時代は、246年間も続いた。奴隷でなくなってからまだ148年しか過ぎっていない。解放奴隷、自由人となってからの時間より圧倒的に長い奴隷制時代に培われた女たちのネットワークは、「子育ては村全体の仕事」³²というアフリカの言葉に凝縮される。

南部農園における奴隷には2種類あった。野良仕事に従事する「農園奴隷」と、白人の家庭の仕事をする「家内奴隷」だった。后者は、白人主人一家のための家事や、白人女性が産んだ子どもを育てる乳母の役目をした。

農園奴隷として暮らす女奴隷たちは、「子育ては村全体の仕事」の言葉通り、奴隷集団における子育てには、女たちが共同してあつた。父親が同じ奴隷である場合もあるが、奴隷主の白人の場合もあるためか、子育てにおける父親の役割より、圧倒的に母親の役割の方が重視された。農園によって異なるが、12歳以下の子どもを母親から離すことを認めない農園もあり、例外はあるが、子どもたちが母親のそばで育てられることが多かった。

子育てや、家事を共有することで、女同士の世代を超えた結束は固まっていた。母たちは娘たちに、小さい頃から生き残る方法を伝授していった

のだった。「歴史家たちはこれまで奴隷制社会に関する様々な研究を重ねてきた。(中略)女性奴隷のネットワークは、そうした研究成果をはるかに超えた強固なものであった。南部白人から取るに足らない存在のように扱われた女性奴隷たちは、自らの結束を高め独立したネットワークを作り、自分たちが何をなすべきか、いかに行動すべきかを知っていた」と断言したのは、奴隷制時代の黒人女性史の専門家、デボラ・グレイ・ホワイト (Deborah Gray White) だった。³³

奴隷制時代以来続く、女たちのネットワーク、祖母から孫娘へ、母から娘へ、さらに血縁のない同じ人種の祖先たちへ、と彼女たちの気持ちはつながっていくのである。これらの歴史を考えると、「シスタス」の祖母の遺書も、オセオラの遺言も当然のことと受け止めてよいのである。



「シスタス」ポスター

第3節 人種を超えた語り継ぎ

同じ人種に財産を残そうとした黒人女性たちだが、この「シスタス」が訴えるものは、さらにもう一段階超えたものだったように思う。何より原作者ドロシー・マーシックが白人女性だということ、さらに登場人物に義妹「ヘザー」という白人女性の存在があげられる。後者は、白人女優エイミー・ゴールドバーガー (Amy Goldberger) によって演じられた。3月と8月の2回の公演を観たが、同じ役を同じ女優が演じたのは、タミカ役のレキシ・ローデスと、この白人女優だけだった。あとは、別の女優に代わっていた。

黒人女性4人の中で唯一の白人女性ヘザー役は、大変強烈で、重要な役回りになっている。8月の公演終了後、多くの聴衆が「出待ち」して出演者たちを迎えたが、ゴールドバーガーと話す機会を得た筆者は、「貴女の存在は、この劇にとっても重要だと思う」と話すと、彼女も「私もそう思って演じている」と誇らしげに答えてくれた。

「黒人の黒人による黒人のための音楽」として、白人に利益を横取りされないためにミシガン州デトロイトに設立したのが、モータウン・レコードだった。第2章第3節で言及した通りである。その顛末は、映画『ドリームガールズ』³⁴ や、ブロードウェイ・ミュージカル「モータウン」で描かれた。「黒人のための音楽」を、人種を超えた白人女性の脚本によって、白人女優の語りを加えて、さらに内容を深めたミュージカルとなったのが「シスタス」だと言える。

黒人女性の視点からの語り継ぎを見てきた第3章を閉じるにあたって、人種を超えた「親」としての語り継ぎを補足しておきたい。1996年夏に経験した「語り継ぎ」である。全米黒人女性協会 (National Association of Colored Women's Clubs: NACW) が創設百周年を迎えた全国大会が、創設地である首都ワシントンで開催され、筆者も参加したときの経験である。同大会では、ある程度の年齢の女性協会員たちによる討論や報告がなされるばかりか、イベントとして男女混合の若者たちによるパフォーマンスが繰り広げられた。そのショーを楽しんで眺める私に「子どもたちは大切、次の世代は宝物よ」と囁いたのは、元NACW オハイオ州支部長で当時、本部歴史委員長のルビー・ホール (Ruby Hole) さんだった。

同協会の歴史を語り継ぐ責任者でもある彼女は「私たちはアフリカ人の子孫ではない。元奴隷こそが先祖であることを決して忘れてはならない。協会名の Colored を変更する必要などない」と誇り高く語ったことが忘れられない。³⁵ 2013年3月に本部を訪問し、ホールさんが数年前に亡くなったこと

を知った。奴隷であったことを何世代も「語り継ぎ」ながら、自分たちの人間としての誇りを保ち、高めようとホールさんの精神は、今もなお変わらず語り継がれているに違いない。

舞台の最後では、祖母の名前を冠した奨学金制度 (Alice Madeline Conny Scholarship for Girls) が創設されたことをシモンが発表する。「時間が経つのは早い。でも時間に追われないで、とよく祖母は言っていました。92歳で亡くなったのですがね」と言ったあとに、最後の曲が歌われる。1979年に大ヒットしたスレッジ姉妹 (Sister Sledge) の♪ We are Family だった。

「人類皆兄弟」という発想、兄弟ではなく姉妹だが、血縁も、人種も国籍も超えて、人類は皆家族なのだと、高らかに歌って幕を閉じるのだった。聖ルカ劇場とは異なって、DVD「シスタス」の場合、舞台は教会での葬儀の場面に変わっていて、大勢の黒人女性教会員たちに囲まれて、にぎやかに歌われた。

1919年以來の黒人女性歌手のヒット曲を紡ぎながら、白人女性の脚本で語り継ぐ黒人女性の歴史は、聖ルカ劇場の舞台から4人の黒人女優と1人の白人女優によって、世界に発信されていく。ドロシー・マーシク同様、黄色人種で日本国籍、と言う異なる立場の筆者が、四半世紀黒人女性史を学び続け、日本語で発信し続けてきたことの「意味」を、マーシクの書いた「シスタス」の中に見つけることができたと思っている。人種を超えた語り継ぎが可能であること、人種を超えるからこそ確認できるウーマンフッドがあることを確信した。

おわりに

2013年6月に出版した拙著『物語 アメリカ黒人女性史—絶望から希望へ』の「おわりに」では、初校段階で300頁を優に超えていて紙幅が限定されていたが、校了時に8頁を確保することができた。その5頁分を執筆した状態の初校を抱えて、年度末2013年3月下旬、ワシントンD.C.とニューヨークに出張した。

ワシントンD.C.は、2000年夏に史料収集で出張して以来12年半ぶりの訪問だったため、国会図書館での史料確認以外にも、すべき仕事は山積みだった。拙著のために写真を撮ることは大事な仕事の一つで、予想以上に貴重な写真を写すことができ、拙著表紙カバーに使った7枚は、すべてワシントンD.C.で撮影したものを使用することができた。

「おわりに」に残された紙幅の後半3頁に、以下のような文章を残した。「2013年3月、ブロードウェイ・ミュージカル『シスタス』にも出会った。連日公演ではなく週末のみの公演、46丁目の聖ルカ教会地下にある劇場で公演されていた。SISTASとはSISTERSの俗語表現らしく、舞台では血縁を超えた『姉妹』が、歴史上の『姉妹』について、1919年から現在までの歌を紡ぎながら語っていた。紙幅の関係で、詳細な説明は他稿に譲るしかない。」³⁶

その「他稿」というのが、本稿となった。非常勤で母校の教壇に立ち、「日本語ライティング」を講義する機会を頂いた2013年度、「ウーマンフッド」について考え続けている。本務校がありながら、あえて『津田塾大学紀要』への掲載を望んだのは、「ウーマンフッド」を考えるにふさわしい紙面だと考えたためである。

大学の教壇でアメリカ史を講義するようになってすでに四半世紀が過ぎた。教室に集う学生たちを「娘」のように慈しんできた私には、母校津田塾大学の教室の学生たちは、「娘」であるばかりか「妹」でもあると、彼女たちには伝えてきた。私たち津田塾大学の卒業生は、梅子先生の「娘たち」だと考えるようになったのは、アメリカ黒人女性たちの語り継ぎを受けたためだった。血縁も、人種、国籍さえも超えて、母娘にも姉妹にもなれることを、私は彼女たちから学んだ。

2013年3月ばかりか8月にもミュージカル「シスタス」を観る機会を得たときに、前述のことを確信したのだった。拙著のわずか3頁しか残されていなかった「おわりに」で、以下のように、本作を紹介した。「女家長、つまり祖母を亡くした3人の全く異なる黒人女性姉妹と1人の白人義妹、姉妹のうち1人の10代の娘、という5人が登場人物で、祖母の遺品整理をしながら、思い出話をして関連する歌を歌っていくのだった。“Oh, Happy Day,” “Strange Fruit,” “R.E.S.P.E.C.T.”など、が歌われた。」³⁷

本稿で展開した議論、「シスターフッド」は、そのままこの女性たちの「ウーマンフッド」にもつながり、一人一人の黒人女性たちが、ウーマニストとしての人生を歩んでいるということなのだろう。日本人としてアメリカ黒人女性史研究者をめざして四半世紀、史料に基づき20世紀転換期の黒人女性活動家たちを「ウーマニスト」と定義した処女作『アメリカ黒人女性の歴史一〇世紀初頭にみる「ウーマニスト」への軌跡』を世に出してから16年が過ぎた。

白人女性ドロシー・マーシックにとっても、黒人女性との「出会い」は、自らへの「気づき」でもあったのだと思う。黒人女性からの依頼で始まった

「シスタス」は、マーシク自身に気づかせ、成長させたのだろう。

20世紀転換期のみ黒人女性たちが「ウーマニスト」だったわけではなく、1619年に初めて連れてこられたイザベラ (Isabella) から、2013年現在、2期目のファーストレディを務めるミシェル・オバマ (Michelle LaVaughn Robinson Obama) に至るまで、アメリカ黒人女性たちは、自らの「強くならざるをえない」³⁸ 人生を生きているのだろう。

註

- 1) One of the interviews in “Sistas: The Musical” Visual DVD in Schomburg Collection (Sc Visual DVD-353), recorded in 2012. 66m.
- 2) ‘PLAYWRIGHT’S NOTE’, “Sistas: The Musical” brochure, p.6.
- 3) <http://www.sistasthemusical.com> (final access, Sep. 24, 2013)
- 4) Dr. Dorothy productions, <http://www.marcic.com/> (final access, Sep. 24, 2013)
- 5) <http://www.marcic.com/respect-sistas.htm> (final access, Sep. 24, 2013)
- 6) Dorothy Marcic, *RESPECT: Women and Popular Music* (TEXERE, 2002)
- 7) ‘PLAYWRIGHT’S NOTE’, “Sistas: The Musical” brochure, p.6.
- 8) “Sistas: The Musical” Visual DVD in Schomburg Collection (Sc Visual DVD-353), recorded in 2012. 66m.
- 9) ビリー・ホリデイに関しては、以下の拙稿を参照されたい。岩本裕子「差別への怒りを♪奇妙な果実に託して [ビリー・ホリデイ物語]」『スクリーンに見る黒人女性』(メタ・ブレーン、1999年) (以下、『スクリーン』と略記) pp.72-84。；岩本裕子「ダイアナ・ロスと『ビリー・ホリデイ物語]」『語り継ぐ黒人女性』(メタ・ブレーン、2010年) (以下、『語り継ぐ』と略記) pp.110-115.
- 10) ホイットニー・ヒューストンに関しては、以下の拙稿を参照されたい。岩本裕子「人気歌手からハリウッド女優へ [ボディガード] [ため息つかせて] [天使の贈りもの]」『スクリーン』pp.188-198, 207-208。；岩本裕子「娘の母であるとともに母の娘であること」『語り継ぐ』pp.173-176.
- 11) Anita Gates, “They’re Not the Supremes, but They Know the Tunes” *New York Times Review*, Oct. 28, 2011. (Correction: November 3, 2011)
- 12) Donovanx Ramsey, “Black Womanist Anthems Shine in ‘Sistas: The Musical’ from Billie Holiday to Beyoncé, Hinton Battle’s off-Broadway Production Celebrates Female Empowerment in Song” *EBONY*, 24 (May, 2013)
- 13) Linda Armstrong, “‘Sistas: The Musical’ celebrates Black women”, *New York Amsterdam News*, 12/22/2011, Vol.102 Issue 51, p25-25.1/3p
- 14) アビー・リンカンに関しては以下に詳しい。岩本裕子『物語 アメリカ黒人女性史－絶望から希

- 望へ』(明石書店、2013年)(以下、『物語』と略記)pp.245, 246, 299, 300.
- 15) 藤浦圭一郎氏のHP「ふじうら.こむ」から引用。(2013.9.9.検索)参考にしたのはベシー・スミスの曲紹介の部分。1999 Keiichiro Fujiura
 - 16) Michelle R. Scott, “Smith, Bessie”, *BLACK WOMEN IN AMERICA*, 2nd ed. editor in chief, Darlene Clark Hine, vol.3, Oxford Univ. Press, 2005, pp.153-157.
 - 17) 現存するベシー・スミスの多くの写真を撮影したのは、ハーレム・ルネサンス期の黒人アーティストたちのパトロンであった、批評家で写真家のカール・ヴァン・ヴェクテン (Carl Van Vechten:1880-1964)だった。オランダ系移民であったヴェクテンの原稿や書簡など、ヴェクテン・コレクションはイェール大学パイネッキ図書館に保管されている。詳細は『物語』p.162を参照されたい。
 - 18) CD “Voices of the Civil Rights Movement – Black American Freedom Songs, 1960-1966” guidebook, p.32.
 - 19) シャーリー・チゾムに関しては以下に詳しい。『物語』 pp. 248-252.
 - 20) Elizabeth Amelia Hadley, “Waters, Ethel”, *BLACK WOMEN IN AMERICA*, pp.330-334.
 - 21) 「ジェマイマおばさん」「ジェゼベル」及びレナ・ホーンに関しては、以下を参照されたい。『スクリーン』pp.40, 65, 138.『語り継ぐ』 pp.116-117, 163, 171.
 - 22) 小関悠氏のHPから引用。「エリカ・パドゥ『タイロン』を読む」(2013.9.9.検索)
 - 23) 前述したヴェクテン・コレクションには、ゾラ・ニール・ハーストンとヴェクテンとの書簡も含まれている。ゾラに関しては以下を参照されたい。『物語』 pp. 161-163, 238, 301.
 - 24) マヤ・アンジェロウに関しては、以下に詳しい。「新たな旅立ちの勇気を与えるマヤ・アンジェロウ」『スクリーン』pp. 58-59, 173, 177, 241. ; 『語り継ぐ』 pp. 21-22, 184. ; 『物語』 pp. 206, 300.
 - 25) マダム・C・J・ウォーカーに関しては以下に詳しい。岩本裕子『アメリカ黒人女性の歴史—二〇世紀初頭みる「ウーマニスト」への軌跡』(明石書店、1997年、2000年重版)(以下、『歴史』と略記)pp. 88-95. ; 『物語』 pp. 149-153, 157-160.
 - 26) メアリ・マクロード・ベシユーンに関しては以下に詳しい。『物語』 pp. 169-173.
 - 27) トニ・モリソンに関しては以下に詳しい。『物語』 pp. 2, 4, 46,47, et al.
 - 28) アンジェラ・デイヴィスに関しては以下に詳しい。『物語』 pp. 213, 214, 220, et al.
 - 29) オブラ・ウィンフレイに関しては以下に詳しい。『物語』 pp. 4, 47, 63, et al.
 - 30) コンドリーサ・ライスに関しては以下に詳しい。『物語』 pp. 4, 227, 228, et al.
 - 31) Introduction of “Education”, *Facts on File Encyclopedia of Black Women in America*, editor Darlene Clark Hine (NY: Facts on File, Inc., 1997), p.1.
 - 32) 『物語』 pp.31-32.
 - 33) Deborah Gray White, *Ar'n't I a Woman?: Female Slaves in the Plantation South*, (New York: W.W. Norton, revised in 1999, 1985)p. 141. (chapter 4 The Female Slave Network)

- 34) 「モータウン・レコードと『ドリームガールズ』『語り継ぐ』 pp.103-109. :2013年ブロードウェイ・ミュージカルとして“Motown”が上演された。筆者は3月に観たが、8月にもまだ上演されていた。映画がダイアナ・ロスと幻の歌手フローレンス・バラードという2人の黒人女性歌手を中心に描かれていたのに比べて、ブロードウェイでは、モータウン・レコード創設者ベリー・ゴードン・ジュニアを主人公に据えて、ステイーヴィー・ワンダーやマイケル・ジャクソンなど、モータウンの男性歌手に焦点をあてた内容だった。
- 35) 「親から子への語り継ぎ」『語り継ぐ』 pp. 178-179.
- 36) 『物語』 pp.300-301.
- 37) 同書 p.301.
- 38) 同書「はじめに」エピグラフ pp.3-6 : 本稿脱稿後、「著者による著書紹介」という原稿依頼があり、『女性情報』2013年10月号 pp.20-21に掲載された。編集者がつけたタイトルは、拙著の中の表現「私たちは強かったわけじゃない。強くならざるをえなかっただけ」となった。

【使用曲一覧：アルファベット順 (“Sistas: The Musical” brochure, p.7)】

- | | |
|--|---|
| 1. A Good Man is Hard to Find (1919) | 19. Nowhere to Run (1966) |
| 2. A Woman's Worth (2001) | 20. Oh, Happy Day (traditional) |
| 3. Ain't Gonna Let Nobody Turn Me Around (traditional) | 21. R.E.S.P.E.C.T. (1967) |
| 4. Baby, I'm Yours (1965) | 22. Say a Little Prayer (1967) |
| 5. Beautiful (2002) | 23. Shoop, Shoop, Song (1964) |
| 6. God Bless the Child (1941, Billie Holiday) | 24. Single Ladies (Put a Ring on It) (2008) |
| 7. Golden (2004) | 25. Society's Child (1968) |
| 8. Hot Stuff (1979) | 26. Stop! in the Name of Love (1965) |
| 9. I Am Not My Hair (2006) | 27. Stormy Weather (1933) |
| 10. I Have Nothing (1993) | 28. Strange Fruit (1939) |
| 11. I'm Gonna Make You Love Me (1969) | 29. Sweet Talkin' Guy (1966) |
| 12. I Will Survive (1979) | 30. Tain't Nobody's Business If I Do (1922) |
| 13. Images (1964, Nina Simone) | 31. Take My Hand Precious Lord (1956) |
| 14. Just Fine (2007, Mary Blige) | 32. That's Why Darkies Were Born (1931) |
| 15. You Keep Me Hangin' On | 33. Tyrone (1997) |
| 16. Milkshake (2003) | 34. We are Family (1979) |
| 17. My Man (Mon Homme) (1922) | 35. You Gotta Be (1995) |
| 18. New Attitude | 36. You Keep Me Hangin' On (1966) |